平成２１年度発掘調査現地説明会

なかぐすくうどぅんあと

中城御殿跡

【日時】2009年１１月２９日（日）

１回目…１１時（１０：３０受付）

２回目…１４時（１３：３０受付）

【場所】旧県立博物館跡地

主催：沖縄県立埋蔵文化財センター

「中城御殿跡」現地説明会資料

平成21年11月29日（日）
沖縄県立埋蔵文化財センター

Ⅰ　はじめに

県立埋蔵文化財センターでは、平成19年度から県営首里城公園の整備に伴う遺構の確認調査として「中城御殿跡」の調査を実施している。これまでに、首里城周辺や守礼門周辺等の発掘調査が完了し、公園計画で未整備であった中城御殿の今後の整備・活用を図るための基礎資料（遺構確認）を得るのが目的である。

Ⅱ　これまでの調査の状況

事 業 名：県営首里城公園整備に伴う発掘調査
所 在 地：那覇市首里当蔵町1丁目1番地
時　　代：近世～近現代（但し、中世の遺物も出土している）
調査期間並びに、その成果は以下のとおり。

1　2007(H19)年11月1日～12月28日

A　遺　構･･･石列や石敷遺構、溝や建物の基礎等を検出。
B　出土遺物･･･青磁や染付、釘（角釘）、瓦、本土産陶磁器、沖縄産施釉・無釉陶器、褐釉陶器等の人工遺物と、貝や獣骨等の自然遺物が出土。
※ なお、平成19年度調査箇所は、遺構の保護のため、調査終了後に埋め戻しを行った。

2　2008(H20)年12月1日～2009(H21)年2月27日

A　遺　構･･･石敷遺構や側溝、建物の基礎、礎石、琉球石灰岩を削り取り加工した池（庭園の一部）等を検出。
B　出土遺物･･･中国産・本土産陶磁器や沖縄産施釉・無釉陶器、瓦、金属製品、玉、円盤状製品、貝や獣骨等の自然遺物等が出土。

3　2009(H21)年6月1日～10月30日

A　遺　構･･･溝や石敷遺構等を検出。トレンチ内では、石列の遺構や溝（暗渠）、石敷遺構、建物跡の床面と思われる部分を検出。
B　出土遺物･･･中国産青磁や染付、本土産陶磁器、沖縄産陶器、瓦、鉄製品、石製品（大理石製の容器）、人骨（新生児骨）、自然遺物等が出土。

① 建物跡（グリッド）

平成 20 年度に 10m×10mのグリッドに沿って調査区を設定し、調査を実施した。石敷遺構や礎石、石列遺構、溝、瓦塀の根石、土壙等が確認された。

石敷遺構は、建物と建物を繋ぐ通路ではないかと思われる。建物の柱を支える礎石と思われるものも確認される。溝については、以下の５つのタイプが確認された。

1，溝の両側の縁石に蓋を受ける段状の抉（えぐ）りが２箇所にあるもの、石敷遺構に付属するものと単独のものがある。
2，溝の片側の縁石に蓋を受ける抉りが１箇所にあるもの。
3，蓋が付かないタイプの溝で、建物内にあるもの（溝内には多くの遺物が入っており、出土した遺物中から、耳盃（杯）やビーズも得られた）。
4，建物の基礎の一部に抉りを入れた溝。
5，暗渠で石敷遺構の下に造られたもの。２箇所で確認されている。

なお、平成 20 年度の調査では、戦後、中城御殿の上に造られた首里市役所の建物の壁や軒先の柱の基礎、レンガで造った溝が確認された。瓦塀の根石と思われる遺構が２箇所で確認された。土壙から花瓶や香炉、耳盃（杯）等の青銅製品が一括で廃棄されたものが得られており、祭祀に関係する遺物と思われる。

平成 21 年度は、平成 20 年度に実施した調査区の周辺を設定し、その平成 20 年度調査区と旧沖縄県立博物館があった箇所の間の遺構の範囲及び体積状況について確認を行った。その結果、蓋が付かないタイプの溝が北側に延びていること、遺構直上に焼土層が薄く堆積することが解った（**試掘２・７・13**）。更に、西側の脇門の前、並びにその脇に試掘坑を設定したところ、脇門から内外に出入りができる道が確認され、平成 20 年度の調査で確認された石敷の遺構は、脇門に繋がる遺構と思われる（**試掘３～５**）。また、石牆（セキショウ）（石積みの壁）の脇に試掘坑を設けて調査を実施したところ、根固石が確認された（**試掘 10**）。遺構を造る前に地盤を強固にするために根固石を置き、その上に遺構を造ったと思われる。石敷遺構と根固石を確認した（**試掘８・９**）。また、層位や出土遺物等から中城御殿移築以前の石組遺構や造成土も確認された（**試掘１・18**）。しかし、中城御殿やそれ以前の遺構が確認できなかった試掘坑もある（**試掘 11・14**）。

② 建物に附属する遺構（トレンチ）

遺構の残存状況を確認するために南北に長さ 60m、幅２mのトレンチを設定した。南側からピット等が確認された。それ以外に建物に附属する石列や溝（暗渠）、石敷等の遺構や床面とみられる瓦等の層が確認されている。それらは建物の床面と思われる。

③ 庭園跡

当初、池の周りには樹木等が繁茂しており、昼間でも鬱蒼とした状況であった。池の前面と背後の平坦部分に小規模の試掘坑を設定し、調査を実施した。前面では古銭や陶磁器等が確認されたが、遺構は確認できなかった。池の背後では、平坦に粗く整形されたとみられる岩盤が確認された。池に伴う遺構は確認できなかったが、池の部分では水路（滝らしき物）や突出した石灰岩を平坦に加工した盆栽や灯籠置き場とみられるものが確認された。

平成 20 年度調査の終盤に池の状況を確認するために、樹木の伐採と池の中に埋まっている土を除去し、池の露出を行った。その後、戦前に中城御殿に出入りしていた古老や庭園を専門とする先生方から庭園や池等について、以下のような御教示を受けた。

1，この池で尚家の人達は薬草を植えていた。庭の前に八畳二間の建物があった。そこで、新婚夫婦が生活していた。一部、岩盤を削り、階段を造っている箇所がある。

2，岩盤を削り、平坦にし、盆栽や灯籠を置いていたと思われる。滝らしき物を造って、そこから水が流れている。この庭の規模からすると八畳二間の建物ではバランスが取れない。建物の規模は大きい物と思われる。

3，琉球独特の階段があり、その数は、奇数となっている。調査の結果、９段と確認した。

4，池の底に漆喰を敷いている。漆喰を敷くのは 18 世紀後半に見られる。

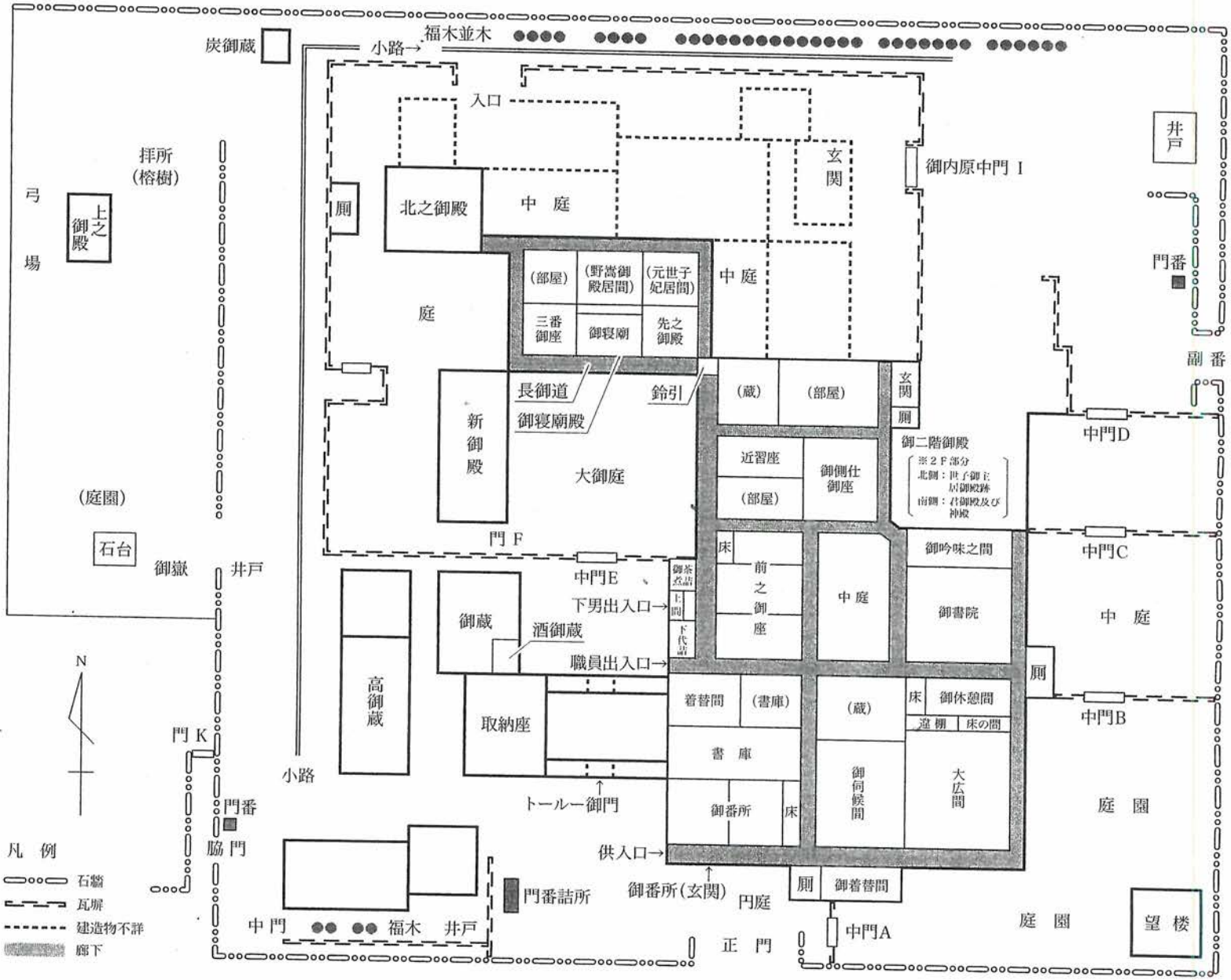
この庭園跡は、残存状況がかなり良く、琉球の庭園の歴史を知る上で貴重な遺構であるという意見があった。

Ⅲ　おわりに

平成 19 年度に実施した箇所は、遺構が出土した層位や出土遺物が古い時期の青磁や灰色瓦などが多く出土していることから中城御殿が存在した時期より古い時期の遺構と解釈している。また、平成 20 年度に調査した箇所は、平成 19 年度の調査箇所と比較して遺構が検出された層位が浅いことと、出土遺物について、本土産陶磁器（肥前や有田等）が比較的多量に出土しており、その陶磁器は新しい時期のものであることから中城御殿の時期の遺構と一致していると解釈している。

これまで、旧県立博物館が石牆復元に伴う遺構調査（平成４～６年）以外に、今回の３度に亘る発掘調査を実施しており、戦災や戦後の破壊、旧沖縄県立博物館の建設が行われているが、中城御殿の時期の遺構の大部分が破壊も受けずに残存していることが判明した。中城御殿の遺跡が大きな破壊も受けず、良好に残っていることから今後、遺構の現地保存を含めた活用を図る必要があるだろう。

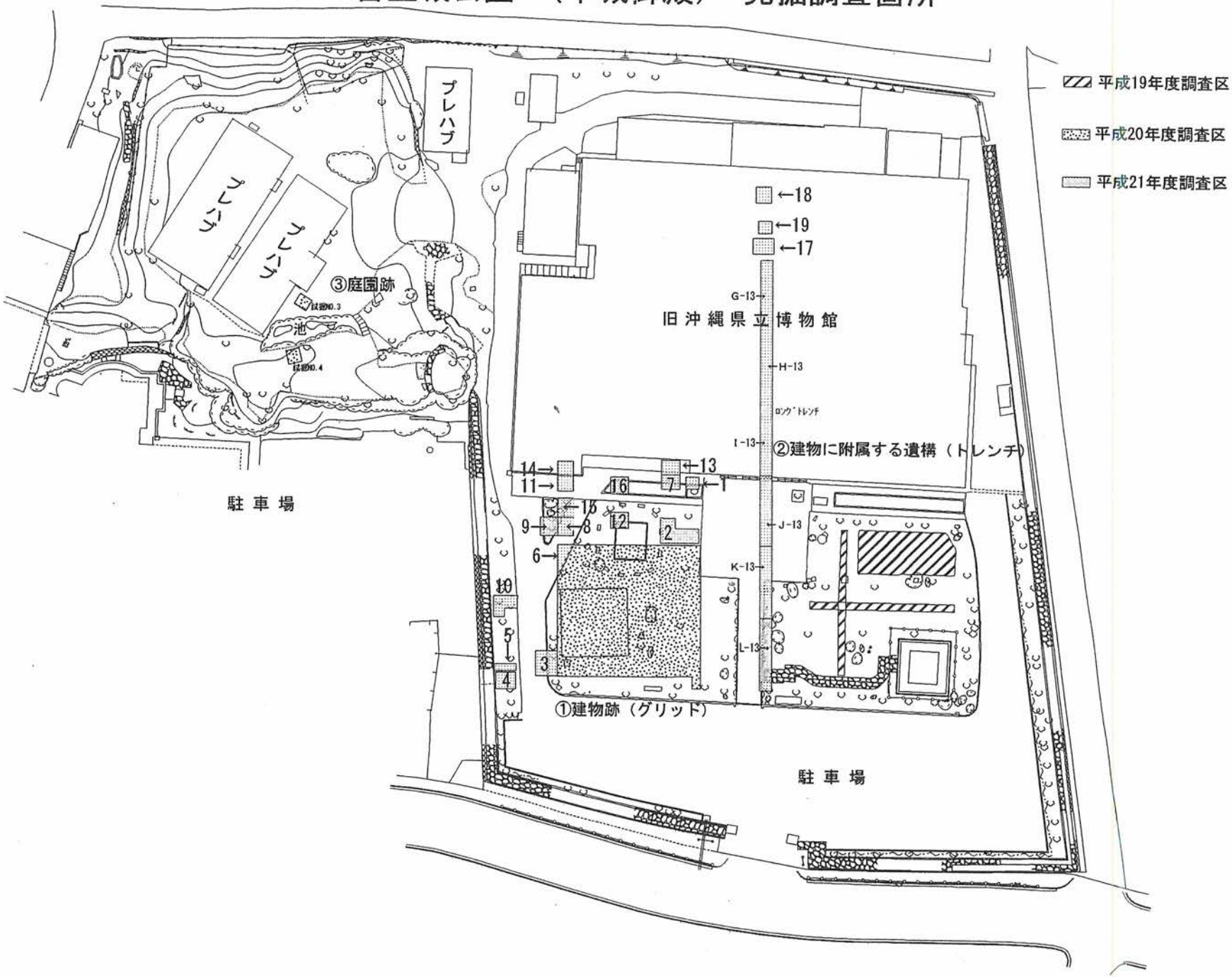
（文責　上地　博）



旧中城御殿概略図

沖縄県博物館1995年『旧中城御殿』より

首里城公園　（中城御殿）　発掘調査箇所



沖縄県立埋蔵文化財センター
行事案内

平成21年度 首里城京の内跡出土品展

「大型青磁が彩る緑の空間 ～海を渡った焼物～」

開催期間：平成22年1月23日（土）～2月7日（日）

第36回文化講座

「明代の朝貢体制 - 東アジアの国際秩序 -」

講師：檀上 寛（京都女子大学教授）

日時：1月23日（土）午後2時～4時（開場1時半）

場所：沖縄県立埋蔵文化財センター研修室

※先着140名 申込不要

ギャラリートーク

1. 1月30日（土）10時～11時
2. 〃 15時～16時（主に学生対象。より専門的な説明となります）

   担当：当センター主任 山本正昭
3. 1月31日（日）15時～16時

   担当：当センター主任 知念隆博

第37回文化講座

「どこまでが琉球か どこまでが日本か」

日時：平成22年2月6日（土）13時～17時

場所：沖縄県立埋蔵文化財センター研修室

パネリスト：新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）

野崎拓司（喜界町教育委員会）

新里亮人（伊仙町教育委員会）

牛ノ濱修（株式会社パスコ・元鹿児島県立埋蔵文化財センター）

コーディネーター：山本正昭（沖縄県立埋蔵文化財センター）